

《インタビュー》

平和は祈るだけではなく、 努力して作り上げていくもの



東 ちづる（俳優、ドイツ国際平和村大使、一般社団法人 Get in touch 理事長）

ドイツには、世界各地の戦争や紛争に巻き込まれ負傷しながら、満足な治療が受けられない子どもたちを現地から連れてきて、医療を受けさせ、リハビリを行って、現地に返す活動をしている「ドイツ国際平和村」という人道支援団体があります。

所在地は、オランダ国境に近いドイツ北西部のオーバーハウゼン市。俳優の東ちづるさんは、「世界ウルルン滞在記」（1995～2007）というTBSの人気番組で1999年に現地を訪問したのをきっかけに、ライフワークとしてその活動を支援し続けてきました。現在も「ドイツ国際平和村大使」という肩書で、募金活動や広報活動をしています。

今回のインタビューでは、俳優として芸能界で活躍する一方で、社会的活動にも熱心に取り組んでこられた東ちづるさんに、「ドイツ国際平和村」についてのお話をうかがいました。

（聞き手：日本子ども学会事務局長・木下 真）

平和村の名称とかけ離れた過酷な現場

——世界ウルルン滞在記は、若手の俳優やタレントが海外でホームステイしている様子をVTRで見ながら、スタジオの回答者がクイズとトークで盛り上げるバラエティ番組でした。そのようなファミリー向けの人気番組で、紛争地帯で負傷した子どもたちの過酷な実態を伝えるという、きわめて重いテーマを取り上げるようになったのは、なぜなのでしょう。

東：もともとは、日本の視聴者に平和村の活動について知ってほしいと、ドイツのコーディネーターから持ち込まれた企画だったのです。ただ、おっしゃる通り、とても深刻でデリケートなテーマだったので、バラエティで扱うのは難しいだろうとTV局で何度も話し合いがもたれました。そして、異例中の異例でしたが、「もともと日本で社会的活動をしている人を連れて行ったらどうだろう」ということになり、番組の回答者でもあった、私に白羽の矢が立ったのです。「東さんが断ったら、この話はなしだ」と言われました。

——ご本人としてはもともと関心があったのですか。

東：そのときまで、ドイツ国際平和村のことは知らなかったです。ただ、私は広島県出身で、子どもの頃から平和教育を受けていますので、紛争地帯の現実、子どもたちの置かれた状況についての関心はありました。すでにレギュラーの仕事などでスケジュールは埋まっていましたが、それらを蹴散らして行かせてもらいました。

——事前にはどんなイメージをもたれていたのですか。

東：平和村という名称ですから、理想郷のような自然の中にビレッジがあって、ニコニコ顔のボランティアさんたちが子どもたちとリハビリ生活をしていると思っていました。ところが、施設はベトナム戦争の頃に暫定的に造られた古びた建物で、入る時には、いったん呼吸を整えて、「この汚さや臭さに慣れよう」と自分に言い聞かせながら入っていくような、予想とはかけ離れた過酷な現場でした。食料も救急設備も足りていない劣悪な環境の中に、戦火で負傷した、片足のない子どもや体にケロイドがあるような子どもたちが大勢いたのです。

——どこ国の子どもたちだったのですか。

東：アフリカのアンゴラ、東欧のグルジア（現ジョージア）、西アジアのアルメニア、中央アジアのアフガニスタン、タジキスタン、ウズベクスタン、東アジアではカンボジアやベトナムなどです。肌の色も目の色も、しゃべる言葉も生活習慣も何もかもが違う、ゼロ歳から15歳までの子どもたちです。

広島の被爆者の姿に重なった

——重篤なケガを負った子どもたちばかりですか。

東：現地では治療を待つ子どもたちは大勢いますが、平和村に連れてくるには3つの条件があります。ドイツの治療で生きていける可能性が高いこと、現地では治療が受けられないこと、帰国の際に受け入れられる

親族がいること。その条件に合う子どもたちを選んで連れてきています。銃で撃たれたり、地雷で足を飛ばされたり、爆撃の火災にあったり、化学兵器の影響で先天的に体が変形して生まれてきた子どもなど、原因や状態はさまざまです。すぐに治療できずに放置されたために、骨が変形したり、組織が壊死したりする子どもたちも少なくありません。

——かなりショッキングな光景を見ることになったのではないですか。

東：平和村は手術が終わった子どものリハビリ施設ですから少しはましですが、現地から航空機で運ばれてきて、トラップを降りて救急車に乗っている子どもたちの姿は衝撃的です。カメラで撮りましたが、とても放送なんてできません。人間はこんな状態でも生きていられるのかと、痛々しくて、見ているのが辛かったです。

腸が腹から飛び出していたり、眼球が流れ出していたり、頭蓋骨の一部が割れてなくなっていたり、包帯を取ったら、ウジ虫が出てきたり、子どもの頃に見せられた被爆者のドキュメンタリーそのものでした。そういう現実が自分の目の前にあることに、大変ショックを受けました。

——いたたまれない気持ちになりますね。

東：初めて訪れたときには、子どもたちに気づかれないように物陰で毎日泣いていました。平和村との約束で、子どもたちの前では、どんなにひどいケガを見ても驚いた顔をしないで、笑顔でいるという約束があるのです。同情する顔になると、子どもはそれを敏感に察して、壁ができてしまうので、ふつうに接することを求められます。

遊んで、話をして、笑い合って、一緒にご飯を食べて、お風呂に入れて……。でも、そうして無理に明るく振舞った反動なのか、トイレやお風呂で一人になると、わーっと涙が出てきてしまいました。それは私だけではなくて、ディレクターやカメラマンも一緒でした。



ドイツ国際平和村で子どもたちとのおやつ時間

——子どもたちの心理的な様子はどんなだったのですか。

東：体にはひどい傷を負っているのに、昼間は元気で、普通の子どものように遊んでいます。現地と違って、ここには戦火がなく、着るものも食べるものもありますから、一時の平和を味わうことができます。でも、夜になるとみんな泣き出します、家族が恋しい、故郷に帰りたいと。たくましさと弱さがミックスされた状態です。ケガのことを聞いても、本当のことは言いたくないらしく、「転んだ」と言ったりします。辛いことは思い出したくないのか、さもなければ大ケガのショックで記憶を失っているようでした。

日本の若者たちが平和村をめざす

——ロケは自由にやらせてもらえたのですか。

東：最初は特定の子どもは撮らない約束でした。でも、私たちはいきなりロケを始めることはなく、2日間はカメラを回さず、スタッフ全員で子どもたちと遊んだのです。そうしたら、それを平和村のスタッフが評価してくれて、アンゴラ出身の2人の少女を中心に自由に撮らせてくれるようになりました。

——現地では子どもたちの世話以外にどんなことをやられたのですか。

東：寄付金集めですね。デュッセルドルフという日本人が多く住む町があるのですが、その日航ホテルのロビーや日本食レストランのカウンターなどに募金箱を置かせてもらい、さらに街頭募金もしました。日本でも最初の放送で寄付を呼びかけると、3000万円以上が集まりました。その後、ドイツ国際平和村は世界ウルルン滞在記の人気シリーズになったので、特別番組も含めて10年にわたって毎年放送するようになり、そのたびに寄付を呼びかけ続けました。書籍や絵本も出版し、その印税も含めて、寄付金の総額は約17億円にまで積み上がりました。



ドイツ国際平和村の子どもたちと

——番組を通じて10年間、その後も継続して支援を続けたというのは、素晴らしいですね。

東：長年続けたことで、番組を始めたときには予想もしなかったことも起きました。平和村でのボランティアを希望する日本の若者たちが現れたのです。その若者たちの多くは、子どもの頃や学生時代に「世界ウルルン滞在記」を見たり、私が執筆した本を読んだりしているのです。そして、看護師や作業療法士の資格を取ったり、英語やドイツ語の勉強を始めたり、国内でボランティア活動の経験を積んだりして、平和村をめざしているのです。もう感動です！ そんなことになるなんて、夢にも思いませんでした。現在までにのべ220人以上、常時10人近い日本人スタッフが平和村で働いています。

歴史教育が社会的関心を高める

——平和村のような社会活動を盛んにし、次世代につないでいくには、何が必要なのでしょう。

東：子どもの頃の教育や体験って、とても大切だと思うのです。ドイツは平和村の活動だけではなく、社会問題全般に関して、みんなとても関心が高いのです。例えば、街頭募金をしていても素通りしていく人なんていないのです。募金をするしないにかかわらず、「これは何の募金なのですか？」と尋ねてきます。街頭募金を呼びかけられると、あわてて携帯を見たり、気づかないふりをしたりする、多くの日本人とは全然違うのです。それも、単に関心を示すだけではなく、積極的にかかわろうとするのです。国民全体にそういう態度が定着したのは、ドイツの戦後教育の成果だと思います。

——世界ウルルン滞在記では、教育現場も訪れていますよね。

東：ドイツ人の社会意識の高さが、なぜ育まれたのか、その背景を知りたくて、私自身が希望して高校に取材に行かせてもらったのです。大きな理由の一つは、学

校で歴史的事実をきちんと教えていることです。ドイツにはネガティブな歴史があるわけですが、第二次世界大戦をめぐっては、歴史全般の教科書とは別に専門の教科書があるぐらいじっくり勉強するそうです。そこで教師は自分の価値判断を示唆することはせずに、事実だけを伝えます。できるだけたくさんの情報を与えて、子どもたちに考えさせ、討論させるのです。

過去を知ること、現代を理解し、未来に希望をもつ。学科の勉強だけではなく、社会とどのようにかわっていくのかを、言語化していく訓練を子どもの頃から課せられるのです。だから、ドイツ国民は社会活動への関心がきわめて高いのだと思います。

——日本人は物議をかもす内容については、子どもが混乱するとか、ショックを受けるとか言って、できるだけ見せないようにする傾向がありますね。例えば、数年前には過激なシーンが多くてトラウマになるからと、『はだしのゲン』を子どもに読ませるべきではないと言出した人たちがいました。

東：そうなのです。私たちが子どもの頃には『はだしのゲン』は必読書で、読まないといけない本だったのです。今頃になって、図書館に置くべきかどうかで議論されるなんて、信じられません。平和村についての絵本『マリアンナとパルーシャ』を作ったときにも、「東さんはなぜこんな残酷な光景を子どもに見せようとするのですか」と非難や疑問の声が一部寄せられました。

でも、平和って祈っていれば実現するものではなく、世界の現実を直視しながら、努力して作り上げていくべきものだと思うのです。私も子どもの頃に原爆の被害について学ぶのは嫌でした。眠れなくなるし、夢に出てくるし、気持ち悪くて、給食が食べられなくなったこともあります。でも、そこで植え付けられた平和のタネは、人生のどこかのタイミングでしっかりと芽を出していくのです。必要なものは「見せない」ではなく、「どう見せていくのか」。周りの大人が子どもの心に宿ったタネに、どういう陽の光を当てて、どう



「月夜のからくりハウス」の舞台



東京ラブパレード(2018年10月8日)

いう水や肥料を与えていくのか、それが大切なのだと思います。

ロジックとともに感性や感情を変えていきたい

——東さんは、まぜこぜの社会の実現をめざすとして、いわゆるマイノリティの人たちとパフォーマンスを展開されています。そこでも、「子どもに見せるな」という圧力を感じることはあるのではないですか。

東：それは本当にいろいろあります。「月夜のからくりハウス」という見世物小屋のような舞台をやっているのですが、そのチケットを買ってくれた子育て家族が、内容を知ると、「子どもにはまだ早い」と言って、キャンセルするなどということがありました。

子どもは大人のような色眼鏡がないので、最初はびっくりするかもしれませんが、すぐに自分なりに咀嚼して順応するものだと思います。例えば、女装のパフォーマーのドラッグ・クイーンの人たちが、子どもたちに絵本を読み聞かせするという活動もしているのですが、子どもたちは、「変なの。おじさんの？それともおばさん？」と聞いてくるのです。「今日はおばさん」と言いながら、絵本を読み始めると、子どもはすぐになじんで、「別にふつうじゃん」となるわけです。

——エンターテインメントというのは、バリアーを簡単に越えさせてくれるところがありますね。

東：そうなのです！ 私はアートやエンタメにはすごく力があると思っています。差別や偏見というのは、ロジックだけでなくそうと思ってもダメなのです。感性や感情の問題だから、偏見をもつ人とは平行線になるだけです。ロジックでわかったように見える人でも、本当にはわかってはいなくて、「隣の家には住んでほしくない」と言ったりするわけです。私は感性や感情を変えたいと思っているので、アートやエンタメにはすごく期待しています。

——東さんは俳優業やタレント業と並行して、さまざまな社会的活動をされています。「芸能人が政治的発言や社会的発言をすると仕事が減る」とよく言われますが、そういう不安はないのですか。

東：もちろん、気にしていますよ。TV局や広告代理店の人は、色がつくとか、そういうことを言いますから。でも、本当のところはどうなのでしょう。私は芸能活動を30年以上やっていますが、真相はわかりません。それに、日本社会って芸能界に限らず、そういうことを言いたがりますよね。公務員やサラリーマンの世界でも、政治的発言や社会的発言はNG。実は、そうやってみんなで規制し合っているだけじゃないかと、最近は思います。だって、なぜダメなのか、よくわからないでしょう。いまは若手の大スターと言われるような人でも、その種の発言をする人が増えてきています。確実に社会はアップグレードしているのではないかと思います。まだまだではありますけど、新しい動きは起きているのではないのでしょうか。

<ドイツ国際平和村・寄付金振込先>

口座：三菱UFJ銀行 本店 普通口座

口座番号：0152887

口座名：ドイツ平和村または Aktion Friedensdorf e.V

<プロフィール>

東ちづる（あずま・ちづる）

俳優。広島県の尾道市因島出身。ドイツ国際平和村大使。一般社団法人 Get in touch 理事長。生きにくさを抱える人たちが排除されることなく、幸せになれる「まぜこぜの社会」を提唱している。骨髄バンクやあしなが育英会のボランティア活動に始まり、世界自閉症啓発デーのイベント、LGBTQ への認知を高めるための映画「私はワタシ～over the rainbow」の制作など、社会的活動に長年携わってきた。東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会では、公式文化プログラム「東京 2020 NIPPON フェスティバル」映像作品『MAZEKOZE アイランドツアー』の総合構成・演出・総指揮を担当。



「世界ウルルン滞在記」番組DVD



ドイツ国際平和村に関する著作



ドイツ国際平和村の子どもたちを描いた絵本
※収益の一部はドイツ国際平和村に寄付されます。